

《史料研究》

1970年サンフランシスコにおける日系アメリカ人史学習の教材開発（6）

田 中 泉

＜構成＞

1. はじめに
2. 時代背景
  - (1) エスニック多元主義
  - (2) 戦後の日系アメリカ人社会
3. 4つの教材
  - (1) 教材A
  - (2) 教材B …以上、第5号に掲載
  - (3) 教材C …第6号に掲載
  - (4) 教材D …パートⅠは第7号、パートⅡ－1～3まで第8号、パートⅡ－4・5 第9号に掲載
4. 分析（以下、本号掲載）
5. おわりに

4. 分析

ここでは、A～Dの教材の内容について分析するが、その視点を、日系アメリカ人の歴史を学習するための教材として、その内容が日系アメリカ人の歴史のどの時代を範囲とし、どんなテーマ・事象が主に扱われているか、また、それらがどのような立場や対象で扱われているか、としたい。

（1）教材A

教材Aは、日本人移民・日系アメリカ人についての概説、および戦時中の強制収容の具体的事実とその影響を対象としている。

まず、概説においては、まず、日本からの移民がサンフランシスコ、ロサンジェルスおよびシアトルに集中したことをあげ、その理由を日本からの船が到着する港や上陸後に得る仕事の内容から説明する。次に、日本人移民の数とその推移をもとにした

時期区分を明らかにした上で、一世と二世のそれぞれの特徴を社会的側面と心理的側面から比較的に紹介するようになっている。一世については、社会的側面として、職業、宗教、教育、心理的側面として日本人の性格、帰属感、価値観を取り上げるようになっている。日本人の性格としては、従順、面子、恥、辛抱、苦勞、忠孝、義理と恩などがキーワードとして示されているのが興味深い。一方、二世については、社会的側面として就職、教育、市民権、政治的組織、宗教、心理的側面として反日的態度を取り上げ、同じ二世でありながら日本で教育を受けた帰米との比較を行って特徴を際立たせるようになっている。

強制収容については、まず、日米開戦から収容までの約 6 か月間の経緯として、真珠湾攻撃、大統領行政命令第 9066 号、転住のための準備、この間の生活の困難を取り上げるようになっている。その次に、強制収容所を、クリスタルシティ（テキサス州）など 4 か所の「司法省管轄敵性外国人収容所」、タンフォラン（カリフォルニア州）など 15 か所の「集合センター」、マンザナー（カリフォルニア州）やトパーズ（ユタ州）など 10 か所の「戦時転住局転住センター」に区分して説明した上で、収容所での生活の様子を組織と運営、教育、仕事、娯楽、宗教、経済、医療、食糧などの社会的側面と一世と二世の衝突、精神的落ち込み、逸脱的反社会的行動などの心理的側面から認識するようになっている。また、トピック的に、忠誠登録の問題について、質問 27・28 とその両者に“no-no”と答えた者のトゥールレイク収容所への隔離、法的問題と本国送還から明らかにすること、また、強制収容されなかった日本人・日系人として、東部やハワイに居住していた人々や留学生のほか、アメリカ軍に所属した兵士たち（442 連隊や 100 大隊）を取り上げるようになっている。

強制収容の影響としては、収容終了直後の期間（1945～48）における被収容者の処遇の問題、さらにその後の二世の同化の状況、法律的・政治的活動、二世と三世の性格的な相違を取り上げるようになっている。この中では、二世のアメリカ社会への同化について重点が置かれているようで、日系人に対する戦時中及び直後にあった敵意が次第に薄れて、受け入れられて同化する過程で、労働市場への貢献、好ましい性格、礼儀正しい態度のほか、日本に駐留して好印象を得たアメリカ兵の帰還、原爆投下への罪の意識、などが挙げられているのは興味深い。

前述したように、この教材 A は、取り上げる内容の項目を構造的に羅列してあるだけなので、その立場や対象を詳細に判断することは難しいが、日本人である一世と日系人である二世・三世を比較して対照的に取り上げているのは特徴であり、二世こそが強制収容を経てアメリカ社会へ同化するというストーリーがうかがえる。それは、「反日的態度」という言葉からもわかるように、アメリカで生まれ育った二世が、アメリカ人としてアイデンティティを持つに至ったことを強調しているのであり、同じ二世でも、あえて日本で教育を受けた帰米と比較するようになっていることから頷ける。

## (2) 教材 B

教材 B は、アメリカ合衆国における一般的な移民の歴史を学習したうえで、教材 A と同様に、日系アメリカ人についての概説、および戦時中の強制収容とその影響を対象としている。

まず、アメリカにおける移民の歴史については、アメリカが多文化国家であり移民集団によって構成されていることを前提とし、その文脈の中に日本からの移民の歴史を位置づけるようになっている。その部分において特徴的なのは、「日本人イメージ」とその表象でもある「ジャパントウン」に焦点化している点である。実際に、クラスの生徒をサンフランシスコにあるジャパントウンへ行かせて、他の地域と何が違うか、何があるか、誰のためのものか、などの視点を持たせて実地見学をさせ、確かに日本人移民がこの地に根付いていたことを確認させている。また、チャイナタウンなど他のエスニックタウンにも思いを寄せさせることで、日本人移民をアメリカの移民の歴史の中で相対化させようとしている。

そのように相対化する一方で、その日本人移民が他の移民集団から劣等な集団とみなされて市民権を得られない「帰化不能民族」として差別された不公正さを、政治的・法律的事象から認識させようとしている。題材として取り扱う事象は、1906 年のサンフランシスコ日本人児童隔離事件、1913 年の外国人土地法、1924 年の新移民割当法（排日移民法）である。これらはいずれも、不公正であるとし、日本人移民の権利が理不尽に侵害される経過がわかるようになっている。

強制収容においてもその「不公正」を強調するように、不合理な点が認識できるように工夫されている。この点では、教材 A が強制収容に関する具体的な事実の積み重ねであったのに対照的である。不合理な点としては、日本人移民が外見、習慣、言語で異なっていたことを理由にアメリカ人が受け入れなかったこと、同じ敵国であってもドイツ人やイタリア人は収容されなかったこと、憲法で保障された市民権を持っていた人（つまり日系アメリカ人）も収容されたこと、収容される際に財産のうち両手で持てるもの（つまりトランク 2 つ）しか携帯することを許されなかったこと、収容終了後に収容所から西海岸に戻ることを許されたが周囲に敵意が残ったままだったことをあげている。

教材 B には、日本人が日本からアメリカへ移民するまでの経緯や、一世や二世の定義、収容所での生活など強制収容の具体的な事実は、含まれていない。このことは、学習者が日系アメリカ人の歴史に関する基本的な知識はすでに学習済みであることを前提としなければこの授業は実施できないことを示している。この点に加えて、教師からテーマを与えられて討議をする学習方法から、中等教育段階で実施する教材であると推定される。一方、ジャパントウンへ実地見学を行ったり、二世・三世に取材する場面もあり、ジャパントウンの近くで、二世・三世が身近にいる地域で実施されるであろうし、そうであれば、学習者の中にも日系人の生徒が含まれているであろうと思われる。

もともとサンフランシスコは、様々な人種・民族が居住する典型的な地域であり、多文化国家の縮図である。したがって、日系人のみならず、様々な移民集団の子孫が暮らしているわけであり、教材の冒頭で、特定の移民集団をアメリカの移民の歴史の文脈の中に相対化する方法は適当であり、効果も大きいであろう。

### (3) 教材 C

教材 C では、作成者自身の記述や諸史料から、戦時強制収容の詳細な状況とその要因、影響についての学習する内容になっている。導入的に配置している 1941 年以前の日本人移民の歴史についても、のちの強制収容に至った背景として取り扱うようになっている点で特徴的である。

1941 年以前の状況については、まず、対日本人移民政策として、1906 年のサンフランシスコ日本人児童隔離事件、1908 年の日米紳士協定、1913 年と 1920 年の外国入土地法、1924 年の新移民割当法（排日移民法）について述べている。次に、サンフランシスコの労働界、新聞（サンフランシスコ・クロニクル）および退役軍人会による反日本人的扇動を資料により説明している。さらに、このような差別的な扱いに対しても、日本人移民たちが日本に帰ることを計画しながらも実際にはコミュニティを形成して、農業や漁業、鉱山業、鉄道保線業などの重労働に従事し、アメリカで家族を築くことを目指したことを説明している。

強制収容については、まず、真珠湾攻撃から 3 か月以上たった 1942 年 2 月 19 日にローズヴェルト大統領の行政命令が出て、陸軍長官が軍事地域を指定し、そこから日本人・日系人だけを排除することが可能になり、3 月 22 日には収容が開始され、16 か所の集合センターを経て、11 月 3 日までに 10 か所の転住センターに約 12 万人の日本人とアメリカ市民である日系人が収容されたことを、実数をあげて説明している。次に、強制収容に至った不忠誠の嫌疑の理由として、天皇への忠誠、二重国籍、帰米の存在、社会的孤立の 4 つを具体的にあげている。さらに、公に表明された強制収容の理由が西部防衛司令部司令官のデウィット将軍が述べた「破壊的工作とスパイ活動の危機からの防衛という軍事的な必要性」であったことを説明している。また、この強制収容に積極的に賛成した反日本人的な労働者や農業者の圧力団体を列挙して紹介している。

続いて、収容所内の生活について 2 つの史料によって簡単に紹介したうえで、収容者に対するいわゆる「忠誠登録」について問題にし、アメリカ軍に従軍する意思があるかを問う第 27 問と、日本の天皇や政府に服従することを否認するかを問う第 28 問に焦点を当て、一世の多くが両方に「ノー」の答え、親と離別することを恐れた二世も同様に答えたことを説明している。また、両方に「ノー」と答えた者たちが各地の収容所からトゥールレイク収容所に集められ隔離されたことを紹介している。さらに、収容された日本人や日系人が収容の経緯やその生活について戦後に記述したものなどから抜粋し、反発や怒り、恐怖、期待と困惑などその反応を説明している。その中で

は、シアトル出身で『二世の娘』を執筆したモニカ・ソネ（20 歳）と、『損傷』を執筆したバークレーのドロシー・トーマスとリチャード・ニシモトの以外は、すべて匿名であった。

また、収容所が閉鎖されてのちの影響を、日系人のアメリカへの態度の変化、経済的損失、将来の可能性などについて、様々な著作から抜粋して説明している。

このように教材 C は、もっぱら戦時中の強制収容について学習するための教材であり、説明的な記述と抜粋した史料を生徒が予め読んでおき、その予習をもとに、授業で教師が質問をして確認することになっている。ここでは、史料に書かれた内容の意味することを深く読み取ることが求められている。例えば、強制収容の本当の理由が、公的に表明された軍事的理由ではなく、人種的・民族的な偏見・差別に起因するものであることが読み取れるようになっている。また、忠誠登録については、一世にだけ対する「帰化不能民族」という仕打ちが、案に相違して、二世の不忠誠におよび、多くの人々をトゥールレイク収容所に隔離せざるを得ない状況を作り出したことが読み取れる。また、将来の可能性の箇所では、同じような状況下で特定の民族集団が同様の人権侵害を受ける可能性があることが読み取れる。図らずも、それは、9・11 同時多発テロの際に、多くのアラブ系の住民が人権侵害を受けたことで証明された。

この教材 C は、まさに、戦争という非常時の状況で、特定のマイノリティに対する不合理な人権侵害が起こることを説明するものであり、ある問題を歴史から学ぶことを目的としているといえる。その意味では、比較的高学年の生徒を対象とする教材といえるであろう。

#### （4）教材 D

教材 D は、教材 A・B・C がいずれも日系アメリカ人の歴史、特に、第二次世界大戦中の強制収容に焦点をあて、その要因および影響も合わせて学習するようになっているのとは対照的に、日本人移民を排斥する 3 つの抑圧的法律（日米紳士協定、外国人土地法、排日移民法）の差別性に焦点をあて、第二次世界大戦以前における日本人移民および日系アメリカ人に対する偏見・差別・排斥の源泉を探らせようとしていると思われる。

まず、導入としてクイズを用いて、民族という言葉や、日本人・日系アメリカ人という民族について生徒が潜在的に抱いているイメージを表現させることで、そこに隠されている偏見や差別を露出させることを目指している。そのうえで、日系アメリカ人のアメリカ農業における貢献や、移民送出の理由のいくつかを明らかにして生徒の持つネガティブなイメージに対する疑問を投げかけている。

日本人に対する偏見・差別・排斥の源泉については、とりわけ反日本人運動の先駆的な地域であったカリフォルニアでの状況を把握させようとしている。まず、日本人の外見的相違や文化的不適応、従属的賃金労働から自営農業・商店経営にステップアップする職業的な脅威、そして日露戦争勝利による植民地獲得を達成した日本の大国

化の脅威などをあげて、ホスト社会アメリカが日本人に対して持っていた感情について多角的に理解できるようにしている。

次に、さまざまな史料を利用して、圧力団体の主張、新聞記事、書籍、映画などにおける日本人排斥の扇動の表現から日本人・日系人への偏見を読み取れるようになっている。例えば、「日本人労働者は土地を買ったり、家を建てたり買ったりしない、ほんの一時滞在者である」という事実に近いものもあるが、「苦力を装った日本人が数隊到着した。彼らは戦争を準備している」や「日本人の大多数は、『道徳』という言葉の意味を理解していない」などという根拠のない中傷的なものが多い。また、20世紀初期の映画では主役級まで上り詰めスターとなった早川雪洲でさえも、恋愛映画ではいつもヒロインを手放さざるを得ないストーリーとなっていることを例にあげ、日本人が「狡猾で、信頼できない、不正直な」民族であるというステレオタイプの人種的偏見が著しかったことが理解できるようになっている。

3つの抑圧的法律については、まず、日米紳士協定について「写真結婚」による妻の呼び寄せという抜け道的手段によって効果が薄められていることを「裏切り」として日本人排斥主義者に批判されたこと、また排日移民法では、連邦議会において、当初提案された日本人に少し有利な特別条項を含んだ法律案を「重大なる結果をもたらす」と述べた埴原正直駐米大使の言葉がアメリカに対する「脅迫」と曲解されて、結果的に日米紳士協定が無効となり日本人に大きく不利な状況を招き、すべての移民を禁止する排日移民法の制定に結び付いたように、日本とアメリカの双方に原因があったことを理解させようとしている。また、外国人土地法では、1913年制定の同法の結果、一世がアメリカ市民権をもつ子ども（二世）に土地所有させることで切り抜けようとしたため、いくつかの圧力団体が主張して1920年になって市民権をもたない一世が、土地取得の際に市民権をもつ子どもの後見人なることを禁じる同法が制定されたことを強調している。

しかし、日米紳士協定が日本人男性と白人女性との結婚を禁じる法律にたいする唯一の解決手段であり、埴原大使の「重大なる結果」という言葉は日米紳士協定による日米関係を評価するポジティブなものであり、1920年の外国人土地法についても、州法が特定の市民の権利を侵害することを禁じた憲法修正第14条に違反するものとする論者の意見から、日本人の立場を擁護している。

このように、教材Dは、日本人に対する偏見・差別・排斥の要因の妥当性を検証させる形式をとっており、特定の人種・民族に対する差別や人権侵害について考える教材としての普遍性を持っているといえる。このため、学習者としての対象はやはり高学年であると思われる。

## 5. おわりに

ここまで分析したように、どの教材も、「日系アメリカ人の歴史」＝（イコール）「日本人移民および日系アメリカ人に対する偏見・差別・排斥の歴史」であると捉えている。特にその中でも、第二次世界大戦時の強制収容が重要なテーマになっていることは間違いない。それは、「2. 時代背景」で記述したように、この教材集が作成されたのが、エスニック多元主義が主張され始めた時期であり、その影響が日系アメリカ人というエスニック集団の運動にも及んだためである。その運動は、主として、アメリカ合衆国政府に対して強制収容についての謝罪と賠償を求めるリドレス運動であった。リドレス運動を成功させるためには、強制収容を経験していない日系アメリカ人の若者や子たちだけでなく、日系アメリカ人以外の人々にもその不正さを正しく認識させる必要があったのであろう。このことは、逆に言えば、リドレス運動から日系アメリカ人の歴史を学ぶ教材が生まれたとも考えられる。

また、現在でも、各地の日系アメリカ人団体が、かつて大統領行政命令第 9066 号が出された 2 月に、“Day of Remembrance”という強制収容に関する行事を毎年行っているが、このことから日系アメリカ人の自分たちの歴史へ興味・関心があり、意識が高いことがわかる。このため「1. はじめに」で記述したように、JACL や NJAHS などの日系アメリカ人団体や SPICE などの教育機関で、教材開発が続けられ教材集が発行されている。そらは、学校教育だけでなく、日系アメリカ人の機関や団体など、様々な場面で学習する場面で使用されている。それらの教材集と今回紹介した教材集を比較することで、内容や方法論で共通点が見つかれば、この教材集がそれらの原型となった可能性が高いと言えよう。その検証については、別の機会に行いたい。

### 【付記】

本稿は、私の仕事の遅さから第 5 号から 6 回にわたり連載する結果になり、本誌を編集されている茨木智志先生には大変ご迷惑をおかけした。特に、この回は第 10 号に掲載していただく予定だったが、原稿が間に合わなかった。この場を借りてお詫びしたい。